第７回目

＊倫理学特講＊＊＊＊　S.Ashina

＜前回＞宗教的象徴と隠喩

・「Ｓ－Ｍ－Ｏ」モデルにおけるＭの意義→宗教的現実性は象徴世界

Ｍ：媒介機能（実体ではなく機能に着目）

・「言葉の宗教」としてのキリスト教　→　言語・意味・聴覚の優位　　cf. ギリシャ

・神象徴と経験領域（宗教経験－表現形態）

・媒介機能の二つの次元

①意味の媒介　→　言語（ラング、パロール）

体系性：記号体系内における諸記号との関係（差異性）　→　記号論

「意味は実体ではなく関係である」

恣意性：　→　正当化の問題

歴史性：メッセージ・了解・伝承　→　解釈学

多義性：

②力の媒介（効果）

意識・無意識・感性・身体の諸レベルへの効果　→　説得力

・力・作用・効果の媒介の二つのレベル

③心理的レベル　→　現実開示（意味の発見）と心の開示

ex)芸術、美的経験

心の統合機能（→精神分析）

④共同体的レベル

共同体の統合　→　統合・排除の二重性（境界設定）

８　宗教的実在とは何か

１．実在論と反実在論：宗教論と科学論との平行性

宗教：主観的感情の表現、錯覚・幻想

科学：科学者集団における約束、現実把握の手段

２．人間の日常性と素朴実在論

宗教者も科学者も多くは実在論である

３．批判哲学（カント）

現象世界は人間の構成による（物自体ではない）

感覚器官というフィルター、悟性に備わったカテゴリー

４．現代思想の問題：批判哲学以降における実在論の再構築

５．この講義との関連から

意味、象徴（ロゴス／ビオス、意味／力）

↓

言語に注目

６．フレーゲの言語哲学

意味と指示（いみと意義）との区別

７．反実在論とは指示機能の否定論

宗教言語は経験世界において何も指示しない

８．隠喩に注目：宗教言語の代表（→物語、モデルへ）

(1)旧修辞学における隠喩（代置理論）

真偽を問えないフィクション、隠喩には真理とか実在への関わりとかは存在しない

(2)新しい隠喩論の展開：ブラック、ヘッセ、リクール、レイコフ

隠喩は認知の問題である、現実の新しい見方のレアルな提示

（一度の指示の廃棄にもとづく二度の指示の開示）

現実を別様に見る能力　→　現実の批判的相対化、夢見る能力

新しい自己

新しい生き方

多元性の肯定：現実は多様に生きうる

９．宗教的実在とは、宗教言語の第二度の指示機能において開示された新しい実在

＜ヨエル＞

3:1　その後／わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し／老人は夢を見、若者は幻を見る。

＜ヨハネ黙示録＞

21:1　わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。2 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。3 そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、4 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

＜文献＞

１．佐々木健一編　『創造のレトリック』勁草書房

２．ジョージ・レイコフ、マーク・ターナー　『詩と認知』紀伊國屋書店

３．M．ヘッセ　『科学　モデル　アナロジー』培風館

４．瀬戸賢一　『レトリックの宇宙』海鳴社、『メタファー思考』講談社現代新書